双葉通信【第 148 回】“電気は東京へ　放射能は福島に”

20220515　上　田　　勉

◇大熊町図書館　解体見直しを求め、住民が署名活動

「原発事故による帰還困難区域にあり、福島県大熊町が解体を予定する「大熊町図書館・民俗伝承館」について、町民有志らが解体の見直しと保存を求めて署名活動を続けている。発起人は「建物は残ると聞いていた。町民の意見をきちんと聞き、震災遺構として活用してほしい」と訴える。

同館は 1996 年に JR 大野駅東口に完成。13 万冊の蔵書がある図書館と民俗伝承館を併設し、多いときには町内外から年間 10 万人以上が利用していた。建物は一部 2 階建てで延べ床面積 2225 平方メートル。東京電力福島第一原発事故後、同館周辺は帰還困難区域になった。その後、周辺は除染やインフラ整備を先行して進める「特定復興再生拠点」となって、6 月末～7 月頭の避難指示解除を見込んでいる。町教育総務課によると、昨年 11 月ごろ、同課が役場内の各課に同館の再利用案を募集したが集まらず、解体を決めた。町議会全員協議会でも異論が出なかったという。建物の耐震性には問題ないが、11 年間放置された影響で「手入れや改修に 20 億円近くかかると見込まれる」（同課の担当者）という。町は解体後、跡地を宅地用地に活用する方針だ。代わりの施設として、図書館や博物館、公民館などを合わせた複合施設を町内に新設する予定だという。こうした町の方針に対して、町民有志らが「解体見直しを」と声をあげ、4 月から署名活動を始めた。発起人の一人で、震災後の町の様子を撮影している渡部千恵子さん（70）は 3 月 11 日、撮影途中に同館前で「解体除染予定」と書かれたコーンを見つけ、解体を知った。「建物は残ると聞いていたが、活用できる建物。壊さなくてもいいのでは」と思ったという。建物中央にある時計台には、震災が起きた午後 2 時 46 分で止まったままの時計がある。渡部さんはそんな同館を「震災遺構として活用して」と訴える。震災当時、熊町小学校 4 年生だった新潟大 4 年の遠藤瞭さん（21）は渡部さんから解体の話を聞き、活動に加わった。震災前は定期的に図書館を訪れ、本を借りてもいた。「町民に説明なく、町は物事を進めている。今後も町民不在で物事が決まるかもしれないと思い、声をあげた」と語る。町外の人も署名活動に参加できるよう、遠藤さんは 4 月からオンラインでの署名活動も始め、これまで 7 千筆以上の賛同を得た。紙の署名も 350 筆ほど集まったという。「大熊町は震災前の物を壊し、震災後のことでしか語れない町になっている」と危機感を募らせる遠藤さん。「震災前も魅力的な町で、その一つが図書館・民俗伝承館だった。町には解体見直しと保存を考えてほしい」と訴える。署名は早ければ 23 日にも町に提出する。署名はオンライン署名サイト「Change.org（チェンジ・ドット・オーグ）」で募っている。（滝口信之）（「朝日新聞」2022 年 5 月 19 日付け）

◆福島県大熊町図書館を解体の方針　代替施設に社会教育複合施設整備を検討　跡地は帰還者向け住宅用地を計画（「福島民報」2022 年 5 月 30 日付け）

【建物の解体が決まった大熊町図書館―13 万冊の蔵書があった（大熊町）】

【「蔵書の無償譲渡会」が行われて、屋内を住民に開放した―大熊町図書館】